

感動を共有した2つの全国大会

教育センター
所長 中山 博迪



若いころから、陸上競技の観戦が好きで、ソウルオリンピックや世界陸上大阪大会など、回数は多くありませんが世界のトップアスリートの競技を直に見ては、夢や感動をいただけてきました。また、陸上課外の指導を離れてから「日本陸連公認審判員」の資格を取得し、競技役員としてのボランティアを始めて、かれこれ20年以上になりました。

今年、新潟県で「トキめき新潟国体」（文科省主催）や「全国障害者スポーツ大会」（厚労省主催）があり、例年より陸上競技役員としての出番が多くありました。上記の大会だけでも、リハーサル大会等も含めると延べ10日間ほど、新潟市にある東北電力スタジアムへ出向きました。このような大会には、今後二度と巡り合わないだろうとの思いもあり、毎朝7時に競技場集合、午後6時までという超ハード(?)なスケジュールでしたが、任を務めさせていただきました。

「国体」では、番組編成員（予選、準決勝を通過した選手の次レースのレーンを組む）でしたので、決勝種目は観戦も可能という幸運に恵まれました。国内のトップクラスの選手がほとんど出場したこともあり大変白熱したレースが展開されました。日本新記録が2つ、ジュニア日本新記録が1つ、大会新記録も31という記録ラッシュの大会でもありました。おまけに新潟県は、45年ぶりの天皇杯・皇后杯の獲得で国体閉会式後の県選手団の盛り上がりはすごく、その時の感動が今でも脳裏に浮かんできます。

「障害者スポーツ大会」では、ウオームアップ係として本番を迎える選手の練習（調整）のサポートをさせていただきました。ほとんどの選手が、コーチの他に介助員を同行していました。

練習（調整）が終わり競技場へ向かう選手・コーチからは、一様に「ありがとうございました」とお礼の言葉があり、私も「頑張ってください」と一言励ましながら送り出しました。

そんなこともあり「障害者スポーツ大会」では、競技そのものを観戦する時間はほとんどありませんでしたが、各都道府県代表の選手やコーチと短時間でしたが心のふれあいをもつことができました。どの選手からも身体などの障害を乗り越え、記録更新に向かってひたむきに努力する姿が伝わってきて、健常者の大会（国体）とはまた違った意味での感動をいただきました。

国体では柏崎市や刈羽村でも、いくつかの競技が行われ、それらを支える役員やボランティアの皆さんのお陰で、大変素晴らしい競技が展開され、多くの市民、村民に夢や感動を与えました。

どの種目も上位入賞するには、大変な労力と時間と資金が必要ですが、地元のスポーツ振興に大きな影響を与えることは確かです。

子どもたちの運動離れや体力低下が叫ばれている昨今ですが、スポーツに熱中したり感動したりする体験を、若いうちに是非味わわせたいものだと思います。

今年行われたスポーツのビッグイベントを思い出しながら、1年をふりかえています。